

法隆寺伝来 繡仏裂の分類と基礎的考察

三田覚之

(大阪大学大学院文学研究科

日本学術振興会特別研究員〔DC2〕)

ここに言う「繡仏裂」とは、かつて法隆寺に伝来し、東京国立博物館ほか、各地の美術館・博物館等に分蔵されている染織作品群である。紺・赤・緑・紫・黄と染め分けられた緞（しじら一経・緯糸に強い撚りを掛けた平組織の織物。縮絹）を下地とし、両面刺繡によって天人の坐像などを表した作品で、七世紀後半の制作と考えられている。

先行研究として、特に注目されるのは沢田むつ代氏の論考で、金銅灌頂幡（法隆寺献納宝物。以下、灌頂幡）の幡身下端に、銅板に挟まれた緞が見出されたことから、繡仏裂が本来の幡足にあると指摘され、およそ作品の属性が明らかとなった。だが、作品相互の一具性を考える上で問題なのが、灌頂幡の本体に表された天人と図像様式が異なること、および、繡仏裂自体についても、繡技を含め、天人の姿が一樣ではない点である。このため本発表では、始めに表現と技法に基づいた分類を行った上で、若干の基礎的な考察を述べようと思う。

まず、繡仏裂を図像様式と技法に従って分類してみると、ほぼ下地裂の色毎にグルーピングできることが注目される。これは下地裂毎に刺繡下絵を描いた工人が分けられていたことを示すと思われ、逆に言えば、同じ図像様式に属し、かつ織り幅と染め色の共通する断片は、本来一続きであったと考えられる。

またその図像は大きく言って、頭部上方で大きく弧を描く天衣を一重に着けるものと二重に着けるものに分けることができる。このうち、天衣を一重に着ける天人は、天衣の形が左右対称であることから古様に属し、天衣先をパルメット形とすることや、裾の折り返し部分をねじって表すことが特徴的である。こうした表現と類する作例としては、金銅小幡（法隆寺献納宝物）の天人が挙げられ、年代的にも近似した関係にあると考えられる。

発表者は先に発表した論考「法隆寺献納宝物 金銅灌頂幡の再検討—造立典拠を中心として—」において、灌頂幡は構成部位毎に制作年代がずれること、また金銅小幡は灌頂幡の挟持として最終的に加えられたことを想定した。これを前提とすれば、金銅小幡の図像と脈絡をもつ繡仏裂は、灌頂幡の完成時期に制作されたものと考えられ、ここに灌頂幡制作における一連の過程を辿ることが可能となる。

次に天衣を二重に着ける天人だが、身体自体を斜側面の方向から捉えた自由な表現はより新様に属すと捉えられ、繡仏裂中においても際だった存在である。繡技自体が前者と異なることから、あるいは制作年代に開きがあるとも想定できるが、なお明確でない。ただし、その図像表現において注目されるのは、天人の坐法や肢体の表現、また天衣の形態が、法隆寺金堂壁画のうち、一号壁の天人や六号壁の化生菩薩と近似した関係にある点である。本来灌頂幡の幡足であったと想定される繡仏裂に金堂壁画との近似が見出せたことで、両者の制作が並行した時期に行われ、工人間にも交流の存在した可能性が見えてくる。